

目次

抄物のカタチヨミとその類縁表現……………山田 潔……………一

「うづくまる」考……………岩下 裕一……………二

助詞バシについての一考察……………小林 正行……………三

——抄物を中心に——

御伽草子に見る室町時代語的様相……………坂詰 力治……………五

——形容詞を中心に——

「善悪」の副詞用法の発達と衰退……………玉村 禎郎……………五

『天草版平家物語』〈重衡東下り・千手〉の段と能「千手重衡」……………小林 千草……………六

——不干ハビアンの「語り」の文体に占める本段の普遍性と特殊性——

狂言台本における「聞ク」と「問フ」「尋ヌル」……………小林 賢次……………二九

『節用集』寛永六年刊本類の本文系統……………佐藤 貴裕……………三〇

『唐詩選講釈』と『唐詩選広解』の指定表現について……………浅川 哲也……………三一

——近世口語体資料としての再評価——

狩谷椋斎『古京遺文』を批判する……………杉本つとむ……………三二

——異体字解読への誘い——

江戸語で書き継がれた『路女日記』……………大久保恵子……………三三

近世後期江戸語・明治期東京語における

助詞モノヲとモノについて……………宮内佐夜香……………三二

文末表現「げす」の評価に関して……………長崎 靖子……………三三

『呉淞日記』に見られる言文一致の萌芽……………山口 豊……………三四

『吾輩ハ猫デアル』の一・二人称代名詞……………小松 寿雄……………三五

——明治東京知識層の言葉(一)——

国定読本における助詞「へ」使用率の変化について……………園田 博文……………三七

——第一期から第六期——

明治期における会話書『独習新案日韓対話』……………成 玗姁……………三八

接続助詞モノデについて……………鈴木 英夫……………三九

——『銀の匙』を中心に——

「マス」から「デス」へ……………田中 章夫……………四〇

——丁寧体の変容——

「お〜いただきますようお願い申し上げます」と

「お〜くださいますようお願い申し上げます」……………北澤 尚……………四一

駅名における分割地名の構造……………鏡味 明克……………四二

文章の文体と単語の文体……………宮島 達夫……………四三

——国研コーパスを利用して——

B. H. チェンバレンの試みた口語……………常盤 智子……………四四

——日本語文例集と出典テキストとの異同から——

『和英語林集成』「手稿」のローマ字綴りとその位置……………木村 一……………四六

幕末における時長表現語……………松井 利彦……………四〇

——「時刻」、そして「時限」から「時間」へ——

近代語学会発表題目一覧…………………………四〇

執筆者略歴…………………………四三

抄物のカタチヨミとその類縁表現

山 田 潔

表2 共起する表現

	史記	漢書	湯山	仏制	中華	論語	蒙求	毛詩	中興	玉塵	計
疑問	75	11	4	2		8	24	22	4	23	173
疑問推量	22	1									23
推量	6	2									8
不定	2									2	4
禁止	17	5	1	1	1	8	6	55		2	96
条件	3					1		3		2	9
平叙	5	2									7
断定										2	2
	130	21	5	3	1	17	30	80	4	31	322

3.1 共起する表現について

では次に、各資料でバシがどのような句中に現れるのか明らかにしたい。表2は、どのような句末表現と共起するかを各資料ごとに示したものである。疑問表現173例、禁止表現96例と大半の用例が集まり、他はそれぞれ非常に少ない使用数であることが指摘できる。疑問表現との共起は各資料で多く見られ、バシの中心的な用法であるといえる。禁止表現と共起するものは、『毛詩抄』で55例と大半の用例が現れた。そのほかの資料でも広く用いられるが、使用数が多いわけではない。『毛詩抄』は、原典である『詩経』の「子孫への戒め」や「為政者への諷諭」という内容に関わって禁止文が多用される傾向があるようであり、そのために禁止表現と共起するバシも頻出したと考えられる⁽²⁾。

その他の表現については、五山系前期の抄物『史記抄』『漢書抄』で平叙、推量表現との共起が少数見られた。また、条件表現との共起が各期の資料で見られたが、いずれも少数にとどまっている。

では、それぞれの表現と共起する例について確認していく。

・疑問表現との共起

疑問表現と共起する例は、基本的には聞き手に疑念の焦点を明示する例と考えられる。講義体という抄物に特徴的な文体により、聞き手に回答を求めない自問の例が多数現れる。聞き手に回答を求める質問の例もあるが、原典の登場人物の発話を写した例に限られ、数は多くない。

。自問の例

1. 緩ハ黄鉄也ト云ハ鉄ノ黄ナモアルカ イサ不知 金ヲ黄鉄トハシ云歟 (史記・卷二)
 2. 上ニ租税之賦ト云ホト二年貢貢数ニ随テ賦ヲ出サスルヲハシ云歟 (漢書・卷五)
 3. 少盜トハ多ウアリ外盜ト云ハヲホエヌソ 外少ト字カ似タソ 少盜テハシアルカ (玉塵・卷二十一)
- 自問の例は、誤字の指摘や不明な語の解釈など、講述者自身が疑問に思い、確信を持って言えない箇所でも用いられる。聴講者に回答を求めるのではなく、問題提起をして疑念を持っている箇所を明示し、暫定的に自ら回答したものと考えられる。これらの例は、疑問文としての疑念の焦点をバシによって明示したものと考えられるが、同時に、断定を避ける形になり、自ら与えた回答が一例であると示して幅を持たせる、例示の機能を果たしているとも解釈できる。疑問推量表現、推量表現、不定表現もこの自問に近い性格を持つため合わせて示す。疑問推量表現は、疑問表現と共に起る例と同様、誤字の指摘や不明な語の解釈など、講述者自身が疑問に思い、確信を持って言えない箇所の例に限られる。推量表現は疑問表現や疑問推量表現に比べて確信度合いが比較的高く、不定表現は疑問点を提示して、そのまま判断を保留するように考えられる。
- 。疑問推量表現の例
4. 八州ト云ハトレ／＼テアラウソ六國ニトレヲソヘウソ九國テハトレヲケテソ只八方ヲハシ云ワウスカソ (史記・卷四)

。推量表現の例

5. 足ト云ハ別ニハヤアルホトニ聆ハ前足テハシアラウス (史記・卷十七)
 6. 元朔六年ニハシ朔旦冬至テアツタヤラウソ (漢書・卷五)
- 。不定表現の例